



絵

で見る歴史と環境

ヘンドリック=アーフェルカンブ（1585～1634年）
《スケートをする人々がいる冬の景色》1609年ころ
アムステルダム国立美術館所蔵 ユニフォトプレス

17世紀オランダの冬

大阪大学教授 桃木至朗

屋久杉の年輪分析からも指摘されるように、14世紀ごろに始まり19世紀後半まで続いた北半球の小氷期のなかでも、17世紀はもっとも寒冷な世紀であった可能性が高い。アンデス山脈、ワイナプチナ火山の1600年の噴火を皮切りに、17世紀には火山の噴火が多かったうえ、1645～1715年には、太陽活動が急速に弱まった（マウンダー極小期）。

ただし海流や気流が複合的に作用するため、一方的に寒冷化が進んだわけではなく、1665年夏のロンドンには熱波に襲われてペストが流行している。

氷結した運河を描いた上の絵をはじめ、「近代世界システム最初の覇権国家」オランダの寒い冬の様子を描いた絵画が多く知られている。この絵に見える活況や、「夜警」（レンブラン

ト）や「画家のアトリエ」（フェルメール）などのすぐれた絵画を生んだ富は、寒冷化を背景としたヨーロッパの「17世紀の危機」のなかで実現したものだったことに注意したい。気温の低下の一方で、人口増によりヨーロッパ全体の食料事情が悪化したことは、ポーランドなどバルト海沿岸地域からの穀物輸出を独占したオランダ海運業に、莫大な利益をもたらした。また、三十年戦争やイギリス革命などの戦乱のなかで、スウェーデン産の銅・鉄を利用してオランダの武器産業が急成長した。カブやソバなど寒さに強い植物の栽培も、オランダからヨーロッパ各地に広がった。万事が順調な時代には差がつきにくいのが、危機や災害に対しては、対処・克服できた者とできなかった者のあいだに巨大な差がつくのである。